ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　六月も半ばに入った頃。この時期があまり好きではない雅也だが、今日は一層憂鬱だった。理由としては、隣の席の友達、出雲神楽がいないというのが一番大きいところだろう。授業中は勿論、給食で席をくっつける相手がいないのが、これほど辛い事だということを、この日雅也は初めて知った。唯一の救いは休み時間の時で、その時は星川太一や他の友人と一緒に話せるのだが、太一を含む他の友人も神楽がいなくて寂しそうである。最初は怪しそうな雰囲気があった神楽だが、実際話してみると、普通に親しみやすい子なのだ。

　学校が終わって、家に帰った雅也は宿題と日課のランニングを済ませ、その後の修行をこなす。六月だろうが何だろうが、ここら辺は変わらない。その後もいつも通りに時間が過ぎていき、いつもの時間にぐったりと雅也は床についた。気分が最低であれ何であれ、こうして彼の一日が終わった――

　――訳ではなかった。

　夢の内容を、雅也はあまり覚えていない。まぁ彼としては、あまり思い出さなくてもいいような、どうでもいい内容だったので、別に気にしていなかった。仮に夢から強制的に現実に戻されても、そのことについては、雅也に文句はない。

　が、寝ている途中で起こされたことについては大いに文句があるわけで、雅也は起こしてきた奴を本気で殴ってやろうかと思った。とは言っても、この部屋にいるのはポケモンか拓馬で、ポケモンは全員モンスターボールの中に入っていて自力では出ることが出来ない。必然的に、雅也の怒りの矛先は拓馬へと向かう。寝ぼけ眼をこすりながら、雅也は拳を握り締めた……のだが、拓馬は今も気持ちよさそうに寝息を立てていた。布団から手足がはみ出ていないところを見ると、今まで行儀よく寝ていたらしい。

「……ほぇ？」

　どうやら拓馬ではないようだと気がついた雅也は、慌てて周りを見渡す。拓馬でないなら、良助が起こしたのだと思ったのだ。

　すると、後ろから肩を軽くトントンと叩かれる。おやっ、と思いながら、雅也は振り向いた。良助なら隣で寝ている拓馬を気にすること無く、いつも通り普通に声を掛けてくるはずだ。こんな風に肩を叩いてくることなど無い。

　ちなみにこの時の雅也は、起こしてきたのが奈央や田島辰巳である可能性は全く考慮していなかった。成長の観点から、こんな夜遅くに田島辰巳が起こしに来るはずがないのは分かっているし、奈央なら自分より先に良助を起こすだろうと思っていたからである。

　そして当然、起こしてきたのが黒ずくめの人だなんて、考えもしなかった。

「……」

　振り向いた先にいたのは、そんな男だった。よく見れば、そいつは雅也と同じくらいの年頃に見える。緑色の鉢巻を額につけて、その子は雅也をジッと見つめていた。

　金縛りにあったらどうなるか、まさにその答えを如実に表していた雅也だった。暫く恐怖が体を支配していたが、我に返るとお腹に力をいれ、大きく口を開く。

「――静かに！」

　だが、そんな雅也の口を、黒ずくめの男の子は手で塞ぎ、小声で、しかしはっきりとした声でそう囁いた。月明かりの位置が絶妙すぎて、雅也からはこの子の顔がはっきりとは見えない。

　それでも、雅也はその声を聞くと、心の中で首を傾ける。全く知らない声ではないことに気がついたのだ。

「ごめん雅也。でも、ついてきてほしい」

　その子はそう言うと、雅也の手を引いて部屋を出る。この子は誰だろうと、寝起きの頭で必死に考えていた雅也は、引かれるままに彼についていった。ただ、ポケモントレーナーの本能からか、モンスターボールとホルダーだけは手に取って。

　彼は雅也の手を引いたまま、玄関から外へと出る。そして、以前太一と出会った河原の方へと向かう。だが、必死に頭を動かしていた雅也も、手を引かれている最中に船を漕ぎ出していた。どうやら、限界がきたらしい。さっき叫びかけた時はほとんど覚醒していたはずなのだが、彼はまだ小学一年生。無理もないが。

　ただ、船を漕ぎつつも、雅也はぼんやりと目は開けていた。完全に寝てしまった訳では無い。とはいえ、最早頭は正常に回っていなかった。既に雅也の頭の中では、これが夢であると認識していたのだ。何処の誰か思い出せない人に手を引かれ、外に出る夢。そう思っていたのだ。

　そして、ついに二人は河原に着く。太一と出会った、まさにその場所だ。

「ほら、起きて雅也」

　立ったまま眠りかけている雅也を、黒ずくめの男の子は雅也の肩を掴んでユサユサと揺らす。雅也の頭は、少しだけ覚醒し、さっきよりも大きく……と言っても、まだちょっとしか開いていないが、目を開けた。

　まだ足りないと言わんばかりにユサユサと揺らす彼だったが、やがて諦めたようにコホンと一つ咳払いをして、肩から手を離す。そして、雅也から五メートル程離れたところまで下がる。

「こ……今晩は。気持ちよさそうに寝ていたところ悪いんだけど」

　そこで雅也は、自分をここに連れてきた子が誰なのか、ようやく分かった。まだ夢うつつだが、今彼の目には、黒ずくめの格好をした男の子の姿がはっきりと見える。

「僕と、ポケモンバトルをしてくれないか？」

　黒ずくめの子は、今ではテレビでしかお目にかかれない、忍者のような黒装束を身に付けた、雅也もよく知っている子だった。月明かりが、その子の顔を照らす。

　雅也のクラスメイトで隣の席の友達、出雲神楽が、真剣な顔でそこに立っていた。